

母親の教育熱

と

幼児

(I)

わが国の母親が教育熱心だ、ということとはもはや定評になっている。しかし、同時に教育に対する関心が、教育一般にむけられるのではなく、自分の子どもだけについての関心であることや、それも教育内容や方法といった面ではなく、いかにして「一流の」学校に入学し、卒業できるか、という面に向けられていること、などもしばしば指摘されている。

これらは、わが国の社会で「学歴」が立身出世のもっとも基

波多野 誼余夫

本的な条件と考えられている、という社会的事情と対応している。そこでこの点について、日本社会学会により行なわれた「社会的成層と移動」の調査をみてみよう。¹⁾

この調査では、まず「ある人の地位や身分が高いとか低いとか」いう場合に「それはいったい何によってきまる」のか、
△職業の種類▽、△学歴の高さ▽、△収入の多少▽、△家柄のよしあし▽、△有名か否か▽、△財産の多少▽の6つの要因を重要だと思ふ順にあげさせている。その結果によると、社会的地位を決定する要因としていちばん重視されているのは学歴であり、ついで財産、職業、収入の順になっており、家柄や名声はあまり重視されていない。

また、どのような人が立身出世をしやすいか、さらに「才能もあり、まじめに努力しているのに出世できない人」がいるが

なぜそうなのかを、前の質問と同様にいくつかの要因を示してそこからえらばせる、というやり方でできている。それによると、立身出世の要因としては、 \wedge 努力すること \vee \wedge 才能があること \vee がもっとも多くあげられており、次いで \wedge 父の社会的地位が高いこと \vee \wedge よい縁故関係があること \vee などで、学歴はあまり重要視されていない。しかし、出世の障害としては、7項目のうちで \wedge よい学校を出ていないこと \vee がもっとも多くあげられ、次いで \wedge よい縁故関係がないこと \vee \wedge 上の人との折り合いが悪いこと \vee となっている。つまり、学歴は、立身出世の十分な条件ではないが、それなくしては高い社会的地位をのぞみえない、必要条件だと考えられていることになる。

もちろん、現実の社会において、高い学歴をもつことやよい学校を出ていることが、実際に高い社会的地位を獲得するのに常に必要であるかどうかはこの調査からあきらかでない。しかし、このように人々が考えているという事実が、入学難や受験競争の激化のひとつの基盤となっていることは確かであろう。

(II)

学校教育が立身出世へのエレベーターである、という考えから、学歴志向の高いものと、職業志向も高い、すなわち、よ

い職業につきたいとのぞんでいる、と予想されよう。このことは、すでに多くの調査で確認もされている。つまり、母親がわが子の教育に熱心である、ということは、ことばをかえていえば、わが子の社会的上昇移動を熱心にのぞんでいるということにほかならないのである。

このような社会的上昇移動、立身出世への要求は、一般に中産階層で強く、下層ではそれほど強くない場合が多い。もっとも、下層であっても、比較的中層に近い人々の場合には、自分たちはともかく、子どもはなんとか中層にまで押しあげようと熱心にのぞむ場合もある。

幼児の生活や人格形成という観点から重要なことは、このよな母親のもつ子どもへの社会的上昇移動への要求と、しつけのさまざまな側面との間に相関関係がある、ということであろう。この問題について、われわれはすでに3回の質問紙による調査を行ってきたが、いくつかの首尾一貫した傾向をつかむことができた。

まず「子どもの学習や能力をのばすことに関係したしつけ」では、一般にわが子に対する教育的要求、学歴志向の高い母親の方が熱心にしつけを行なう、といえる。中層と下層とくらべて、中層の方が熱心であるばかりでなく、社会経済的にはひとしく下層にあるものなかも、学歴志向の高い母親と低い母

親とでは差があるのである。

われわれの調査で対象にしたのは就学前一年間のしつけであるが、この年令段階においてさえも、学歴志向の高い母親（男児は大学まで、女児は短大・大学までやりたいとのぞんでいる場合）は、学歴志向の低い母親にくらべて、子どもがせいっぱい能力をのばせるようにはげましたり、設備をととのえてやったり、絵本をよんだりお話をきかせたり、子どもの作品を批評してやる、というものはつきり多いためである。

読み書き算術、といった点での指導については、ほとんど差がみられないのだが、もっと一般的な知恵や能力の発達をうながす、というしつけについては、かなり差があるらしい。

次に「交友関係についてのしつけ」でも、教育的要求の高い母親の方が、子どもの交友関係に気をくばっていることが多いようである。これに対して、教育的要求の低い母親では、子どもを放っておき、どんな友達と遊んでいるか気にとめていない、という場合が多い。

「衛生に関係したしつけ」、つまり食事の前に手を洗ったり、起床や就寝の時間をきめて規則正しい生活をさせる、という点でも、教育的要求の高い母親の方がずっと熱心にしつけを行なうらしい。下層の教育的要求の低い母親では、ここでも放任的な傾向がめだっている。

もうひとつ、教育的要求の低い母親のしつけの特徴として、

しばしばきびしい罰や拒否的なしつけを与える、ということをおかなければならぬ。「家のなかでけんかをしたり、さわりだりしたときには『そんなことをするなら、外へ行ってやりなさい』などといったことがある」、¹⁾「子どもが親のいうことをいつまでもきかなかつたり、あまりひどいはずらしをしたときには、たいてい叱ったことがある」のは、どちらも教育的要求の低い母親に多いのである。

要約するなら、教育的要求の高い母親は「学習や能力に関係したしつけ」や、「衛生についてのしつけ」を熱心に行ない、交友関係にも気をくばっているのに対し、教育的要求の低い母親は、より放任的で、反面きびしい罰を与えることが多い、ということができる。

(Ⅲ)

われわれは、さらに、社会経済的に中層の母親（この層では、ほとんどが男児は大学までやりたいと考えている）、社会経済的には下層であるが子どもの学歴志向は高い母親、下層でしかも子どもの学歴志向の低い母親、それぞれ約10名ずつ（いずれも小学校一年生男児の母親）をえらんで面接してみた。³⁾（かり

に、はじめの方から、Aグループ、Bグループ、Cグループとよんでおく。)この場合には、しつけに関して3つのグループの間に差異は、いっそう顕著であった。

どんなおとなに育てたいか、きいてみると、Cグループでは「人に迷惑をかけない人ならよい」「平凡な人になってもらいたい」「普通ならよい」などの回答が一般的で、とくに積極的な希望は表明されないのに、同じ下層でもBグループの母親たちは「世間にめいわくをかけない」というだけでなく「できれば社会的地位もたかく、人の役に立つような人」「期待はあまりできないが、出世できればしてほしい」など、子どもに社会的上昇移動をのぞむ表現が多くみられる。さらに、Aグループでは社会的地位だけでなく、性格や態度に言及する母親が多くなる。「明朗でのびのびした人間であればよい」、「誠実味のある、人間性のある人」、「地味・堅実・誠意ある人」など、自分の子どもをしつけようとする目標を、言語的に表現することが可能なのである。

しつけの実際としても3グループの間には、はっきりした差異があるように思われた。Cグループでは、母親はけっきょくのところ、子どもをほったらかしにしている点で共通のように見える。「いまのところ、大きくするだけでせいっぱい」とか、「ふだんはかまってもいられない」などと母親みずからも

表現しているように、毎日のくらしに追われ、子どもの教育にまで手がまわりかねる、ということなのであろう。しつけは、意図的になされているのではなく、そのときどきに目についたことを注意する、というにすぎない。親のそのときの気分で叱る、ということも多いようだ。それも親の一方的な見方から、子どもはなぜそのような罰が与えられたのかわからないまま、きびしい罰が行なわれるのである。

Aグループすなわち中層ではこれとまさに対称的である。このグループの母親は、大きく2つの類型に分けることができそうだ。すなわち、一方では、勉強だけをつめこませるのではなくて、人間として立派に、ということをお願いしている母親がある。そこでは、中間層の生活のゆとりが、子どもの人格形成に概してのぞましい影響を与えているようにみえる。他方「立身出世してほしい」と考え「学校の勉強がよくできるように」ということだけがしつけの中心になり、あとはわりあい子どもの自由にさせている、という母親がある。この型の母親は、自分たちが獲得してきた中間層の地位を子どもたちが維持し強化することが最大の関心事であり、その他のことはほとんど意識のうちにない。そこではまさに、教育は立身出世の手段としてのみ評価されているように思われる。しかし、どちらの型の母親の場合も、親は子どもの教育に関心があり、かつ生活に余裕があ

るところからそれを実行にうつしている、という点では共通である。

Bグループすなわち下層に属するが子どもの学歴志望の高い母親はいろいろな意味で、この両者の中間に位置している。それゆえ、このグループは、ひとりひとりの母親により、しつけのしかたがちがいがい、あるものはAグループのそれと近く、他のものは逆にCグループに近い、というようにきわめて異質的である。しかし、しいて共通の特徴をさがすとすれば、このグループの母親は一般に子どもの教育についての関心は高いが時間的に余裕がなく、実行の方はできたりできなかったりだ、という点であろう。いそがしさにかまけてつい放任的になってしまう場合もみられるのである。

(IV)

以上のような調査結果にもとづいて考えるならば、母親の教育熱心、ということに対して幼稚園が対処すべき態度は、かなり複雑なものとならざるをえない。

ある意味では、母親が子どもに大きな期待をもち、その教育やしつけに関心をもっていることは、幼児教育をすすめるうえで都合のよい面が多い。逆に、子どものしつけを行なう時間的

な余裕に乏しいだけでなく、そうした意欲にも欠けており、そのときどきの親の感情にもとづいてしつけがなされる、という子どもの場合には、幼稚園にかけられる負担はずっと大きいものになるであろう。

しかし、母親の教育的関心は、ほとんどの場合、わが子の立身出世への要求と密接にむすびついている。したがって、母親が行なうしつけにおいて、どうしても干渉過じょう、ことに社会的上昇移動と関係した領域での発達課題の達成を過度に促進する傾向が生じやすい。また、幼稚園教育に対する母親の要求もどちらかといえば知的能力の発達をうながすことが強調され、全人的な発達の基礎を与えるという幼児教育のねらいや、それをささえる子ども同志の集団生活の発達の指導に対しては、むしろ冷淡でさえあるかもしれない。

したがって、こうした母親の教育的関心を正しい方向に導いていくこと、母親の近視眼的な、利己的な要求に流されずに、幼児教育の本道を歩んでいくことは、困難ではあっても、是非とも通さなければならぬスジであろう。このところをしつかりさせないと、幼稚園の予備校化、という現象がますます促進されるばかりでなく、さまざまな教育技術上の革新（たとえば数の指導についての）さえ、かえって幼児教育をそこなうものになってしまうおそれがあるだろう。

戦後の社会一般の民主化に伴って、教育においても、国民がその権利のない手となったときから、彼らが教育に対して何をのぞみ、何を要求しているかを考慮することが、教育行政にとっての最初の仕事と考えられるようになった。このこと自体はもちろん正しいにしても、父母の教育に対する態度は、比較的せまい視野からする、自分の子どもだけのためのものであったり、あるいは教育に対する関心そのものが低く、はつきりした要求をひき出しえない場合もあるものと思われる。そこで、教育のことについての専門家である教師たちは、父母の教育に対する要求をそっくりそのまま受けいれようとするのではなしに、これを批判的にうけとめ、逆に父母に働きかけて、その教育意識を高めていく、ということが要求されるはずである。幼児教育の場合には、これまであまりにも父母の教育的要求をそのまま受けいれすぎている。あるいはそれにおされてしまっていた、と考えられはしないだろうか。ここでは、教育を立身出世のためのエレベーターとして考える傾向についてだけみてきたわけであるけれども、もっと広い学校や教育全般に対する要求についても、父母のそれはさまざまな矛盾を含んでい

る。たとえば「親孝行や目上のものを尊敬する道徳をしつかりと教えてほしい」という要求も、「自分の考えをはつきり人に主張できる子どもに育ててほしい」という要求も、どちらも一般の父母によって支持されているのである⁴⁾。そして、多くの父母は、自分たちのさまざまな要求が論理的には矛盾することに気づきさえしないのである。

父母の教育的要求に耳をかたむけるとともに、それをどのように導いていくべきか、がもっと考えられなければならないであらう。

(東京大学教育心理学研究室)

注

- (1) 尾高邦雄編「職業と階層」毎日新聞社 一九五八
- (2) 依田新 波多野誼余夫ほか「親子関係における階層差(一〜四)」日本教育心理学会二、三、五回総会発表
- (3) 「親子関係における階層差(五)」日本教育心理学会第五回総会発表
- (4) 波多野誼余夫「父母の教育に対する態度のQ・技法による研究」教育心理学研究十卷一号、一九六二

*

*